

## 第3章

### 本会議・サイト活動

滋賀・京都

広島

沖縄

東京

## 滋賀・京都サイト

### 滋賀・京都サイトの概要

第57回日米学生会議は歴史と未来の二側面を持った本年度会議テーマに沿って、滋賀と京都で幕を開けた。未来型のアプローチとしては、「環境」というキーワードを掲げた。滋賀は琵琶湖の保護をはじめ、先進的な環境政策で有名であり、京都は世界的な環境基準である「京都議定書」が採択された場所である。アメリカが京都議定書に批准しないまま発効となった本年に日米の学生が環境に対して議論を交わすことが重要であると考え、サイトのメインイベントである「環境プロジェクト」を開催した。

また、古都京都では歴史的なアプローチを試みた。嵐山、金閣寺、清水寺を訪れ、伝統旅館の宿泊、宿坊体験も行き、日本の伝統文化をアメリカ側参加者と共に体験し、文化交流を試みた。最終日には阪神大震災から10年を迎えた神戸を訪れ、人と未来防災センターで自然災害について学んだ。近年、世界中で深刻な自然災害が多発している中、神戸の経験を日米の学生で学んだことは非常に意義深かった。

### 滋賀・京都サイトのスケジュール

7月26日	日本側参加者集合 日本側直前合宿
7月27日	日本側直前合宿 米国側参加者到着
7月28日	ジョイントサイトオリエンテーション スキット交換 オープニングセレモニー
7月29日	分科会 文化プロジェクト（京都国際学生映画祭受賞作の上映・能の上演、体験）
7月30日	環境プロジェクト
7月31日	京都散策（嵐山・金閣寺・清水寺） 宿坊体験・旅館宿泊
8月1日	フィールドトリップ in 京都
8月2日	滋賀出発 人と未来防災センター訪問 神戸日米協会による昼食会

（実行委員サイトコーディネーター：三谷佳孝）

### 滋賀・京都サイト活動記録

※参加者の活動記録を基にして作成している。

#### 7月26日

第57回日米学生会議の日本側参加者40名は、今日、最初の開催サイトである立命館大学びわこくさつキャンパスに全国から集合した。本会議自体はアメリカ側参加者が到着する27日からの開始であるが、その前に日本側参加者は一日早く集合して直前合宿を行ったのである。

アイスブレイキングをしながら再会を喜び合った後、会議全体の流れを確認した。明日にはアメリカ参加者が到着するという現実が信じられないというのが正直な気持ちであった。

### 7月27日

午後九時に、アメリカ側参加者が遂に到着した。翌日に行われるスキット（異文化紹介の寸劇）練習を早々に切り上げ、高ぶる気持ちを抑えながらこれから共に約一ヶ月を過ごすアメリカ側参加者のもとへと向かった。各自、割り当てられたbuddyのために書いた色紙を持ってパートナーを探す。初めて出会う自分のパートナーを目の前に嬉しさの反面、今まで逃げ回っていた英語からも逃げられないぞと覚悟を決めることとなった。

### 7月28日

今日がまさに第57回日米学生会議参加者にとって事実上最初の日である。簡単なオリエンテーションの後、日米の参加者の間でアイスブレイキングが行われた。オープニングセレモニーでは、まず日米学生会議の主催団体である国際教育振興会の大井氏が会議の歴史について説明してくださり、緒方四十郎氏より基調講演を頂いた。そして第57回会議の日米各チェアによるスピーチがあった。その後は、打ち解けあって日米の両学生が思い思いの時間を過ごしていた。

### 7月29日

今日は本会議で初めて、分科会でのディスカッションが行われた。午後には、「文化プロジェクト」があり、伝統芸能と映画鑑賞で、日本文化を堪能した。初めに京都能楽連盟による能が披露された。そして、私たちは京都国際学生映画祭で入賞した「America」と「春雨ワンドブル」の二つの映画作品を鑑賞した。夕方には、アメリカ側参加者と日本側参加者によるタレントショーが行われ、盛りだくさんのパフォーマンスが披露された。

### 7月30日

この日は、京都サイトの目玉企画の一つである環境プロジェクトが行われた。プログラムでは、一般の方もお招きし、有識者の方による基調講演に加え、民間企業の方々、アメリカ側参加者、日本側参加者から計4組がプレゼンを行い、環境問題への多角的アプローチを発表した。午後には、日本の民間企業や地元高校生によるワークショップが行われた。また、第57回日米学生会議の特別な取り組みとして日米学生会議京都議定書が提案された。



**7月31日**

立命館大学のセミナーハウスを出発し、京都終日バス旅行第一の目的地の嵐山に向かった。そこで参加者は各々が思い思いの京都の町を体験した。全体としては、まず金閣寺を見学し、その後に清水寺へ行った。その日は二つの分科会はお寺に宿坊し、その他の分科会が二つの旅館に分かれて泊まることとなった。いずれの参加者も日米学生会議が始まってから立命館大学の宿泊所以外での初めての外泊と言う事で興奮した様子でそれぞれの夜を過ごした。

**8月1日**

前日に引き続き京都市内での活動であったが、この日は幾つかのグループに別れて観光を行った。京都市内の寺社巡りをした人や、奈良や大阪の方まで足を運んだ人もいて、関西での自由時間を存分に楽しんだようであった。夕方からは、賀茂川で花火を行い、多くの人が参加し京都の情景を楽しんだ。両国学生の距離が少し近くなった一日でもあった。なお一日の最後には、サイトの終わりという事もあり、日米の学生がそれぞれ別れてリフレクションを行い、会議に対する想いを共有し合った。

**8月2日**

初めの一週間を過ごした滋賀を後にし、広島へバスで移動した。その途中で神戸の阪神淡路大震災記念「人と防災未来センター」に立ち寄り、その後神戸日米協会の方との昼食会が開催された。

“人と防災未来センター”では、1995年に起きた阪神淡路大震災について、映像や実験を通して地震の仕組みや防災の取り組みを学んだ。昼には神戸市内のホテルで神戸日米協会の方々に昼食会を開いて頂いた。短い時間であったが、暖かい歓迎と美味しい食べ物に、一行の旅の疲れもとれたようであった。そして、夜には広島へ到着し広島サイトが始まった。

**参加者ノート****7月30日 環境プロジェクト**

日米の学生で環境問題について語り合い、それらを対外的にもシンポジウム・ワークショップ形式で発信していくというのが環境プロジェクトの趣旨だった。しかも、アメリカが京都議定書からの脱退を表明して以来、アメリカの京都議定書への復帰、そしてポスト京都議定書に向けての動向を踏まえ、環境問題は日米にとって重要なトピックの一分野であることは間違いない。

環境プロジェクトの概要は、まずシンポジウム形式で京都大学大学院教授植田先生の講演から始まり、アメリカ側参加者による政策提言、企業（関西電力・三洋電機）のプレゼンテーション、日本側参加者の身近にできる環境対策に関するプレゼンテーションと JASC 京都議定書の提案が行わ

れた。そして、最後に環境への取り組みに熱心な京都の市立高校と上記の企業、日米の発表者が各ブースに分かれワークショップを行った。

環境プロジェクトで得られた最大の成果は、日米の学生がこのプロジェクトに向けてともに語り合いプロジェクトを作り上げていけたことだと思う。日本に到着したばかりというのにアメリカ側参加者は共和党にも民主党にも属さない自分たちの政策提言に向けて語り合い、日本側参加者もプロジェクトの企画面だけでなく運営面も含めて共に協力し合い一つのものを作り上げていった。出会って間もないメンバーがここまでの調和と協力を生み出し一つのもの作っていく姿に JASC の醍醐味を感じ、感動した。

そういった準備の結晶である当日のシンポジウム、そこでは普段から抱えている思いをぶつけるアメリカ側参加者、自らの大学の取り組みを紹介する日本側参加者、そして識者や企業の方のお話などを通して、様々な知識を得、ワークショップではそれらを議論した。

長いようで、短い一日。

春合宿以後続けてきた JASC 環境プロジェクトの準備。プロジェクト内で学術的・政策的な視点に加え、実際に環境問題対策に深く関わる日本企業の視点も日米両国の学生に伝えたいという自らの思いは実現した。また、広報のために県庁に行くこと、企業に講演の打ち合わせに行くこと、御礼文など様々な書類を書くこと、そして記者会見、すべてが始めてであり、失敗も含めて有意義な体験となった。

すべてが終わり、一日の最後に飲んだ一杯の生ビールはとてつもなくおいしかった。

(山田 裕一朗)

第 57 回日米学生会議（以下、JASC）は、滋賀・京都サイトから始まった。アメデリの到着、オープニングセレモニーに始まり、初めての分科会、能や日本映画を鑑賞したカルチャープロジェクト、個性の祭典タレントショー、メインイベントであった環境プロジェクト、夜のお楽しみの飲み会、そして日本の文化の中心京都への小旅行。その後の濃密な一ヶ月の予兆ともいえる程、最初のサイトから充実した内容であった。そのあまりの濃さ、充実ぶりに、6 日間の内容を 1 ページに収めることは困難を極めるが、以下、私が感じたことを 3 点ほど、述べようと思う。

第一に、アメリカ人のルールを守る意識である。当サイトのメインイベントである環境プロジェクトでは、JASC 中に私たち学生が環境への配慮として実際にできる行動を示した JASC 京都議定書が発表された。内容は多岐に渡ったが、主なものとしては、「冷房の温度を 28 度に設定する」、「エレベーターではなく階段を使う」等があげられた。環境プロジェクトの後、アメデリはこれらをその通り実行していた。暑いと言いつつも冷房の温度を上げていたし、また、階段も使うようになっていた。私は、このように発表された議定書の内容を自分たちの問題として受け止め、かつ、確実に実行するアメデリに感銘を受けた。とかく日本においては、このようなことがたとえ提案されても、多くの学生は、他人事としてとらえ、実際に行動に移すことがないことが極めて多いように思われる。日本の学生の悲しい現実であるが、このようなアメデリの行動に、襟を正された思いがした。

第二は、飲みニケーションである。学生の夜の楽しみとなれば、やはりお酒であり、JASC においても、序盤から飲み会は開催された。従来、飲みニケーションが日本の職場文化の特徴であると言われてきたが、最近では以前に比べ上司と部下が仕事の後に飲みに行く機会が減っているという報道を耳にしたことがある。私自身も飲みニケーションの意義については懐疑的であったが、JASC でその意義を理解した。初対面、しかも言語も文化も違う二つの国の人間が、打ち解ける。本来極めて困難であろうことだが、飲みニケーションによってその困難さは間違いなく緩和された。お酒、というあまり高尚ではないものかもしれないが、そのユニバーサルな意味を実感した。

第三に、手探りの JASC 感である。滋賀・京都サイトは、最初のサイトだったがゆえに、それぞ

れが JASC とはどういう場所か、どのようにこの JASC と一ヶ月間付き合っていくのか、そんなことを模索していたサイトでもあった。私自身も JASC のペースをつかむのに戸惑っていたし、それは少なからず他の参加者も感じていたようである。アメデリとジャパデリとの距離が縮まるように縮まらなかったのもその表れだったのだろう。振り返ってみればジャパデリとアメデリの関係は、横軸に時間、縦軸に親密度をとった正の二次関数のようであった。即ち、時間が経過するにつれ、その親密度は急激に高まっていった。このような現象は、集団生活においては当たり前のことなのかもしれないが、最後の東京サイトでの親密さと比べると、この滋賀・京都サイトでの戸惑いやぎこちなさが、なんとも不思議に映る。当サイトは、一ヶ月に及ぶ JASC、そしてこれから一生続いていくジャパデリとアメデリの関係の、ごくごく序章に過ぎなかったのだ。

(古川 啓之)

## 広島サイト

### 広島サイトの概要

今日、日本人のみならず、世界中の人々がヒロシマと聞いて原子爆弾の悲惨さを連想するのではないだろうか。長崎と並んで原爆を投下された広島は、今や世界有数の平和都市である。我々はこの広島で、原爆資料館を見学し、被爆者のお話を聞き、平和教育の現場を実際に見て、終戦から今日に至るまでの日本の歩みを振り返った。

当サイトでは、「ヒロシマをどう伝えるか」というテーマでパネルディスカッションを行った。パネリストに「はだしのゲン」の作者である漫画家中沢啓治氏、長崎国際大学教授の中根允文氏、ネバーアゲインキャンペーン前大使の野上由美子氏をお招きし、被爆体験や原爆の及ぼす精神的影響、平和教育の未来についてお話いただいた。また、在日韓国朝鮮人被爆者の李実根氏に、マイノリティーとしての被爆体験について語っていただき、ヒロシマの意義の多面性をあらためて感じる事ができた。さらに、佐々木貞子さんの母校である広島市立幟町中学校の毎年恒例の平和集会を見学し、教諭にも平和教育についてレクチャーしていただいた。そして8月6日は平和記念式典に参列した。

その他自由時間には、フィールドトリップで宮島に行ったり、お好み焼きを食べたりして、友好を深めた。

### 広島サイトのスケジュール

8月2日	広島到着 広島サイトオリエンテーション
8月3日	分科会 フィールドトリップ（宮島 etc.） スペシャルトピック
8月4日	原爆資料館見学 被爆者の語り部 広島会議 クレーンプロジェクト
8月5日	幟町中学校の平和集会见学 平和教育レクチャー
8月6日	平和記念式典参列 リフレクション 灯籠流し
8月7日	沖縄へ出発

（実行委員サイトコーディネーター：出浦寛子）

## 広島サイト活動記録

※参加者の活動記録を基にして作成している。

### 8月3日

この日は朝から、ホテルの近くの区民センターで分科会のセッションがあった。昼食をとり、午後からは何グループかに分かれてフィールドトリップを行った。ほとんどは宮島へ行ったが、中には市立美術館や広島城を訪れる人もいた。夕食後はスペシャルトピックの時間だった。事前に語りたいトピックを参加者から募り、参加者は各自自由に好きなグループに参加する。音楽と NGO について熱く語るグループもあれば、日米の恋愛観についてまったり語るグループもあった。



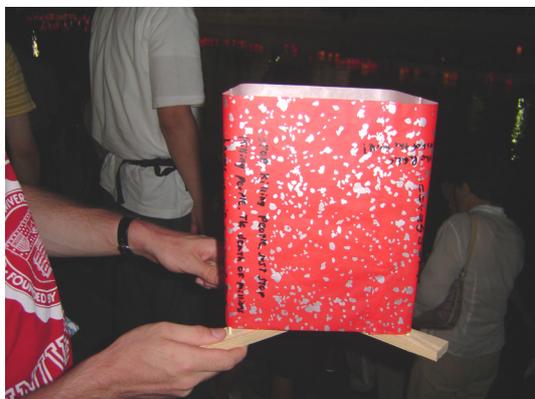
### 8月4日

まずは、広島平和記念資料館に行き、その後に在日の被爆者である李実根氏から被爆体験のお話をしていただいた。その後、広島会議のため広島女学院に行く。会議では長崎大学名誉教授・長崎国際大学大学院教授の中根允文氏には被爆者に関する精神医学の取り組みを、ネバーアゲインキャンペーン元大使の野上由美子氏には「戦争体験をどう伝えるか」についての平和教育に関して、そして漫画「はだしのゲン」の作者である中沢啓治氏には被爆体験のお話をしていただいた。その晩は、平和記念公園に千羽鶴をおさめる「crane project」を遂行しに行った。



### 8月5日

この日は、佐々木貞子さんの母校である広島市立幟町中学校を訪れた。毎年、他校の学生や平和団体を招いて行われる、平和集会を体育館で見学した。その後は幟町中学校の生徒方々が校内を案内してくれた。有名な折鶴の碑や、平和記念公園の貞子像の原型である小さな貞子像を見ることができた。さらに、幟町中学校の教諭の宮奥先生に、平和教育の実態についてレクチャーをしていただいた。レクチャーの後は、グループに分かれて、お互いの平和教育経験や、平和教育のあるべき姿について議論した。



### 8月6日

終戦記念日のこの日は、平和記念式典に参列した。前の三日間に広島を見て回り、色々学んだばかりだっただけに、平和記念式典は日米学生会議参加者にとって感慨深いものであった。参列後は、広島での最後の一日を各自、自由に過ごした。



## 参加者ノート

## 8月4日 公開講演会「ヒロシマをどう伝えるか ～戦後60年を迎えて～」

戦後60年経った今、廃墟の中にあったヒロシマは経済的にも精神的にも復興を遂げ、平和都市ヒロシマとして重要な意味を持つ都市となった。悲惨な被爆体験を乗り越え、世界に No More Hiroshima というメッセージを発し続けるヒロシマは、世界中からその重要性を認識されている中で、同時に世界中での核実験や劣化ウラン弾の使用に関して、ヒロシマの声は届いているとは言えない面がある。その中で、この広島講演会は、参加者にとってヒロシマを今後どのように解釈し、どのように伝えていくのか、そしてヒロシマを多角的に捉えてその意義や今後のあり方を考える機会となった。

まずは、午前中に平和記念資料館を回った後にその地下の会議室で李実根氏という在日朝鮮人被爆者の方からお話を伺った。李氏は、重ね重ね、ヒロシマは「被害」の地であると同時に「加害」の地であることを強調された。というのは、朝鮮半島から強制連行された方も、経済的な理由で来日された方も、被爆した後、医療面で差別されて診療を受けられなかったのだ。原爆という、熱線や爆風や放射線で建物や多くの人々が焼き尽くされた現象の後でさえ、差別だけが残ったという現実を、李氏は話された。そして参加者は、ヒロシマを巡る「被害」と潜在化していることが多い「加害」について考えさせられた。質疑応答やその後も、参加者が熱心に李氏に質問をしていた。

その後、午後に広島女学院のゲンス・ホールで3名のパネリストを呼んでの講演会があった。これも色々な視点でヒロシマについて考える機会となった。

一人目のスピーカーは、「はだしのゲン」の作者で被爆者でもある中沢啓治氏であった。彼は1945年8月6日、当時国民学校1年生だった時に広島市に原子爆弾が投下され、原爆で父、姉、弟を失った経験が話された。父は日本画家であり、終戦後、手塚治虫の「新宝島」を読んで感動し、漫画家になることを決意されたそうだ。中沢氏は、原爆投下時の光景を話されて、すごく印象に残った。皮膚が爛れてそれを引きずる人、水を飲んでショック死する人、死体が水の中で膨張する話を聞き、本や教科書で読むようなヒロシマとまた違ったヒロシマを知ることができた。また、彼の平和への願いを強く感じた参加者も多くいたと思われる。

二人目のスピーカーは、ネバーアゲインキャンペーン元大使であり、現在は英国ブラッドフォード大学院にて平和教育の研究を行っている野上由美子氏であった。広島での平和教育の柱は被爆者による被爆体験なのだが、被爆者の高齢化、そして原爆教育が大きな壁にぶつかっていると言われる今、新しい方法を模索する必要があるのではないだろうか、という視点から話してくださいました。野上氏は、アメリカで核軍縮教育を行っている NGO でインターンをされた時に見た、世界の核の状況について考えさせるような参加型のワークショップについて、参加者の前で実演してくださいました。この方法の特徴は、核問題が自分たちの手から離れたところにあるのではなくて、その影響を直接的に受けるのは私たち一般市民であることを考える機会を与えてくれるということであり、そう感じた参加者も多かったはずである。

三人目のスピーカーは、長崎大学名誉教授、長崎国際大学大学院教授である中根允文氏であった。中根氏は被爆者の精神状態やPTSDなどに関する精神医学の取り組みを、疫学的精神医学研究の方法を駆使してこれまで精神疾患に係る臨床特徴を明らかにして心理社会的側面からの原因探索を行ってきたことを話してくださいました。今まで、原爆被爆により身体的にどのような影響が生じたかについて多くの研究がなされている中で、心理的な影響に関しては極めて貧困な知見しか得られていなかった。そこで、中根氏は原爆被爆者の精神健康調査、原爆に胎内被爆した人における精神疾患の発現頻度調査、そして原爆被爆者における心理的影響の調査の話をしてくださいました。

3名が話された後のパネルディスカッションも、アメリカ側の参加者側からも活発に質問が飛んだ。

8月4日の広島講演会は、分野や視点が違う4名のスピーカーの存在で、ヒロシマの意義や捉え方、そして平和や核兵器に関して色々と考えさせられる機会となった。

(島村 明子)

広島サイトはそれまでの環境、そして文化をテーマとした滋賀・京都サイトとは異なり、日米において大きな位置を占める戦争そして原爆という歴史が、広島市全体の平和記念式典を前にした緊張感と相まって参加者全体をそれまでとは違う雰囲気でも包み込んでいた。

正直に言って、この広島サイトは私を含めた参加者全員にとってかなりハードなものになったのではないと思う。というのも5日間と言う短い日程であったが、私たちはヒロシマの歴史、そしてかつて日本が体験した戦争の歴史について常に向きあっていた。日米両方の JASCer たちは訪れる全ての場所を通して、自分たちの歴史を認識し、それと真剣に向き合い、そして何かを学び取ろうとしていた。私はその中で歴史認識の多様性、そして未来へつなげるために私達が何をしなければならぬのかということを知り、考えられたのではないと思う。

きっとこれは私だけが持っていたのではない先入観だったと思うのだが、私の意識の中でこの JASC に参加する前はアメリカの人と言うのは第二次世界大戦、そして原爆投下の事実をみな一様に肯定していて、被害者としての日本の見解を理解してもらう事は難しいと考えていた。その考えが覆されたのは広島市記念公園を訪れたときの事である。平和記念資料館を含めた公園内の見学の際に、アメデリたちは一様に押し黙り、そして何人かの人たちは「これ（原爆投下）は起こるべきではなかった。」とつぶやいていた。また8月6日の平和記念式典が近いということで、様々な団体が日本、そして世界各地から平和を訴えるためにこの公園に集っていたのであるが、その中に炎天下の中、ハンストをしながら「原爆をヒロシマに投下して、本当に申し訳なかった」という内容が書かれたアメリカの老夫婦がいた。彼らは私達が近づくと、“We’re so sorry.” と言いながら、涙を流して謝っていた。彼らの話を聞くにつれて自分たちの歴史を理解してくれる人がたとえ少数であったとしてもいるのだという事実に、自然と涙が溢れた。

広島に滞在した最終日、参加者全員が集まって催されるリフレクションの時間が設けられた。これはこのサイト中に思ったことを自由に述べるものであり、私はその中で一人のアメリカ側参加者の言った話が忘れられない。彼女は平和記念式典に参加したときの話をしたのであるが、式典が始まる前に公園の外でたくさんのボーイスカウト、ガールスカウトの子供達が献花用の花を配っていた。彼女にも一人の男の子が笑顔でその花を手渡したそうなのだが、彼女はその時にその男の子をつかんで「私たちの国が何をあなたたちにやったか知っているの!? なんであなたたちはそんな風に笑ってアメリカ人の私に花をくれるのよ!」と言いそうになったそう。また広島サイト4日目に行われた広島市の幟町中学校訪問のときのレクチャーにて触れられていたのだが、近年、戦後時間が経つにつれてこの原爆の、戦争の歴史を取り扱う平和教育が縮小傾向にあるという。私はこれらの話の中で、未来へ私達が繋げなければいけないことと繋げてはいけないことに対する私なりの見解が見えた気がした。それは「歴史の中で起こった事実は決して忘れてはいけない。しかし私達が未来を進むために、憎しみの感情は次世代には伝えてはいけない。」ということだ。

私はこの広島サイトにおいて、伝えていかなければいけない戦争の、ヒロシマの事実を私たち JASCer に様々なアプローチから説いてくださった全ての人たちに心からの感謝の気持ちを述べたいと思う。

(中島 朋子)

## 沖縄サイト

### 沖縄サイトの概要

古くから、武力によらず他の地域と相互依存を深めることで安定を確保してきたため国際色豊かであった沖縄。地理的特異性から独特の文化を育み、現在にもそれを受け継いでいる。一方で、沖縄が第二次世界大戦中日本で唯一の地上戦の舞台となり、現在でも米軍基地問題を抱えているのは周知の通りである。そのような背景をもつ沖縄は、日米両国はもちろん、世界から注目されている。

このような背景を持つ沖縄にて、第57回日米学生会議では戦後60年を振り返るというテーマのもと、日米の戦後の歴史に深く関わりまた現在も議論の耐えない基地問題に焦点を当てることとした。

とりわけ、力を入れたプログラムは、とかく抽象的な議論に陥りやすい基地問題を沖縄に住んでいる方々の視点から考えるというものである。その中心となったのが嘉手納基地訪問及び辺野古訪問、そして糸満市でのホームステイである。これら一連のプログラムを通して我々参加学生は基地問題を「考える」だけではなく、「感じる」ことができた。

### 沖縄サイトのスケジュール

8月7日	沖縄到着 沖縄サイトオリエンテーション
8月8日	分科会 レセプション
8月9日	在沖縄米軍基地訪問
8月10日	糸満市庁舎見学 ひめゆりの塔訪問 轟の壕訪問
8月11日	辺野古訪問
8月12日	ホームステイ
8月13日	東京へ出発

(実行委員サイトコーディネーター：袴田隆嗣)

### 沖縄サイト活動記録

※参加者の活動記録を基にして作成している。

#### 8月7日

飛行機の都合で日本側参加者と米国側参加者は別々に沖縄に到着することとなった。お昼過ぎに那覇に到着した日本側参加者は、沖縄のビーチを満喫しながら米国側参加者の到着を待った。夜7時過ぎに到着した米国側参加者を待って糸満スポーツロッジにて夕食をとった。その後続けて沖縄サイトオリエンテーションを行った。



#### 8月8日

朝から光洋小学校へ徒歩で移動して分科会を行った。終日の議論の後、NBCサムシングフォーにてレセプション

が開催された。沖縄の料理と芸能の素晴らしさに酔い、皆でエイサーを歌い踊ることで会場全体が一つになった。

### 8月9日

沖縄で最大の嘉手納空軍基地と海兵隊のキャンプフォスターを訪問した。その後も那覇アメリカ総領事公邸でレセプションをして頂く等、昨日の地元交流とは対照的に、政治・安全保障という視点から沖縄を見る機会となった。



### 8月10日

朝、太陽光発電パネル等を用いた環境に配慮した糸満市庁舎を見学し、その後平和祈念資料館及びひめゆりの塔を訪ねた。学徒隊として戦争を経験された方のお話で多くの学生が涙を流した。また轟の壕という戦時中の防空壕の中を探索させて頂き、一同その暗さ及び静けさに当時の人々の恐怖に思いを馳せた。



### 8月11日

米軍基地の移設が問題となっている辺野古見学へ出かけた。基地移設に反対する住民の方々のキャンプにて説明を受け、また様々な話を聞かせて頂くこともできた。その後、場所を沖縄国際大学へ移し、沖縄タイムズの屋良朝博記者、沖縄国際大学の佐藤学教授及び沖縄県基地対策課の桃宇常雄氏をお呼びし辺野古の基地問題を中心としたパネルディスカッションを行った。



### 8月12日

午前中にフリータイムを設けた。ビーチへ行くものもあり、ゆっくりと読書するものもあり、皆思い思いの時間を過ごした。14時に続々とホストファミリーが集まり、不安げな表情をしながらも、期待に胸をふくらませた米国人と日本人の学生のペアが、それぞれの家庭へと出発した。

### 8月13日

14時すぎに皆ホストファミリーからロッジへと続々と戻りはじめた。一斉に荷物をまとめてバスに乗り込むと、東京への飛行機に乗り込んだ。

## 参加者ノート

沖縄で見聞き、感じ、考えたもの、それらは私たちが今まで知っていた沖縄を大きく変えた。琉球王国の名残、日本唯一の地上戦、基地問題、これらすべてを持つ沖縄。一週間の滞在を終えた後、もはや私は「沖縄＝VACATION」という連想がまったくできなくなっていた。

私は沖縄で「日米」という二国間でものをみたのではなく、「沖縄」「日本（政府、本土）」「アメ

リカ」という三者間で物事を考えなければならなかった。基地問題についての話の中でよく聞かれた言葉に、「それは沖縄と日本政府、本土との問題であってアメリカは関係がない」だとか「日本政府とアメリカ政府の間で進められなければならない話し合いである」などがある。嘉手納基地を訪れた際には米軍が近隣住民とうまく付き合っていくために努力を重ねているとしきりに語っていた。また基地移転の候補地となっている辺野古で座り込みを行っている住民の話聞いた際には、住民が必死になって自分たちの生活を守ろうとしている姿を目の当たりにした。しかし私達の多くはその事実を知らず、沖縄での基地問題は本土、全国版のメディアであまり取り上げられていない。沖縄と本土に壁が存在しているのを感じた。この三者の関係に気づいたのは基地問題だけではない。沖縄戦についても同じ構図が見て取れた。沖縄戦での日本人の死者は 20 万人とも言われており、そのうち住民が半数を超える。当時の沖縄県民の 4 人に 1 人が亡くなったということだ。これには地上戦であったからという原因以外に、集団自決、日本兵の非人道的行為によるものがあげられる。沖縄戦の証言者の方が「昼間は米軍、夜間は日本軍が怖かった。」「日本軍に助けを求めていくと死がまっており、敵国である米軍に従い非難すると助かった。」とおっしゃっていた。沖縄住民には、60 年前も現在も、軍隊が自分達を救ってくれる、保護してくれるという考えがないのかもしれない。またここで、私は自分がいかに無知であったか気づかされ、またその歴史、事実を知ることの重要性に驚かされた。

しかしながら、沖縄で見たものは「傷跡」や負の面ばかりではない。これらを乗り越え、前に進もうとしている沖縄という地、そしてそこに住む人々の強さ、暖かさも知ることとなった。「いちやりばちよーでー」私が沖縄のことを思い出すたびに出てくる言葉がある。「いちやりばちよーでー」とは「一度出逢ったら皆兄弟」という意味の沖縄の方言である。多くの沖縄の方々が、私たち JASCer に覚えておいてほしい、そしてそれぞれの地で広めてほしいと教えてくださった言葉だ。ひめゆり学徒隊の方のお話や戦争を経験したおじい達の話に「アメリカが憎い、日本軍が憎い」という言葉は一度も出てこなかった。「家族や友達の命、多くのものを奪った戦争は憎い、基地も早くなくなってほしい！けれど、戦争中の兵隊、基地に働く人々を憎いとは思わない。どんなことをされてもやはり同じ人間だから。」この言葉を聞いたとき私の中でまたひとつ何か動いた。戦争や多くの苦しみを乗り越えてきたそこには沖縄の深い優しさと暖かい心、そして強い決意があった。私達は、歴史や事実を知り伝えていくとともに、「いちやりばちよーでー」この言葉を、そして沖縄の人々の心を世界中に広める重役を担ったのだ。

最後に、レセプションを主催してくださった糸満市役所の方、ホームステイを快く引き受けてくださった方々、そして沖縄の米軍基地関係者の方々のおかげで、とても有意義な経験をすることができた。改めてここにお礼の言葉を述べたい。

(木原 由貴)

8月7日から13日まで、私たち JASCer 約 80 名は第三の開催地である沖縄を訪れた。一週間という短い期間ではあったが、戦後 60 年を迎えた沖縄を様々な角度から垣間見ることができた。特に有意義であったのは、次の 3 つの体験をアメリカの学生と共有できたことである。

一つ目は、沖縄に駐留する米軍基地を、「内から」そして「外から」捉えることができたことである。9日に訪れた嘉手納基地では、施設見学の後、空軍・陸軍の方による基地問題の説明を聞いたり、在日米軍の方々と共に簡単なトレーニングを体験したりした。更に、米国領事の方から直接お話を聞く機会にも恵まれた。一方、その2日後に訪れた辺野古では、米軍基地縮小を目指し座り込みを行う地元の方々にお話を聞くことができた。透き通る沖縄の青い海を前に「私たちの土地を返して」と座り込みを行う人々の主張と、その真上を飛ぶ米軍機から放たれる轟音。戦後 60 年経った今も、未だ戦争が完全に過去のものになったわけではないことを、身をもって体験した。

次に、沖縄の歴史を、様々な施設見学を通してアメリカの学生と共有できたことも貴重な体験であった。10日に行った平和記念資料館、平和の礎やひめゆりの塔で学んだこと、そしてか語り部の方のお話は、戦争を体験していない日米双方の学生にとって想像を絶するものであった。特に沖縄戦の時の非難壕である轟壕に行けたことは、JASC の中で最も意義のある体験の一つであると思う。

単なる観光旅行では絶対に訪れないであろう壕に入って戦時中の追体験をしたことによって、戦争が「教科書の中のできごと」ではなく実際にあったという当たり前のことに改めて気づかされた。60年前に敵国だった米国の学生と、資料館を共に見る。そして感じたことを共に語る…。こんな貴重な体験ができたのも、JASCのおかげである。その後訪れた糸満市役所や観光農園では、戦争体験を乗り越えて未来へ羽ばたくこれからの沖縄の取り組みの力強さを感じることができた。

三つ目は、ホームステイやレセプションを通して沖縄の人のやさしさ、温かさに触れることができたことである。ホームステイでは、日米の学生1人ずつがペアになって、会議中にはなかなか行くことができなかった観光に連れて行っていただいたり、沖縄の家庭料理をご馳走していただいたりと、久しぶりにゆったりとした時間を沖縄の人と過ごせた。レセプションでは、豪華な会場やお食事のみならずエイサーや沖縄の伝統的な踊りを披露していただき、その後 JASCer も一緒に参加し踊りを楽しんだ。陽気で温かい沖縄の人々のおかげで素晴らしい時間を過ごすことができた。

(重原 由佳)

## 東京サイト

### 東京サイトの概要

世界有数の大都市、東京。ここで第57回日米学生会議は締めくくられた。

国際的地位を高めるこの地で、日米2国間の枠組みを越えた対話の実現した。北京大学から意欲的な学生を招聘した『日米中3カ国学生協議』の開催である。たった3日間のこの会議に渡航費は自己負担、という条件で公募をしたものの、実に24人の中国の学生からの応募があった。最終的に来日した中国の学生11人を迎え、3カ国の学生はゲームや東京散策をしながら交流を深めた。そして互いの文化的価値観や歴史観を共有し、更にはYKK株式会社のご協力をいただきグローバル企業のあり方等について考え、活発な意見交換とプレゼンテーションを行った。

東京サイトでは世代を越え、過去の日米学生会議参加者や関係者の方々との交流をすることができたサイトともなった。分科会討論、講演会、そして各レセプションを通して、豊富な知識とご経験に基づく含蓄あるお話をうかがう多くの機会に恵まれた。

会議の集大成としてその成果を社会に発信することを目指し、一般公開のフォーラム(報告会)を開催した。今年は在日米国大使館東京アメリカンセンターのご協力により、初めて日米学生会議実行委員会との共催となった。学生は分科会の議論、全体でのディスカッション、講演会、ホームステイ、環境や戦争を真剣に考えたそれぞれの企画、フィールドトリップや文化体験等、1カ月間を通して学び、考え、感じたことを再構築し、発表した。第22、23回日米学生会議参加者のグレンフクシマ氏(エアバス・ジャパン株式会社代表取締役社長、在日米国商工会議所元会頭)の基調講演をいただき、学生の発表に対して中山俊宏氏(日本国際問題研究所主任研究員)および第39回会議参加者の武田興欣氏(青山学院大学国際政治経済学学部助教授)から講評を頂戴した。ご来場くださった方々との交流会をJASC ジャパン(OB会)のご協力により開催することができた。当日は会場に入りきれないほどの人に来場していただき、盛況のうち無事終了したフォーラムは、学生にとっても一体感と達成感を感じる会議の大きな節目となった。

第57回日米学生会議の終わりが目前となると、来年の第58回日米学生会議の新しい実行委員が16人選出された。

参加者だけの内輪で行われた閉会式は終始和やかな雰囲気の中、行った。最後の夜は、参加者は寝ることも忘れて共に歩んだ1ヶ月を振り返り、思い出や夢を語り合った。別れを惜しみつつ、学生たちは「共に創る明日」に向かい、巣立った。

### 東京サイトのスケジュール

8月13日	羽田空港到着
8月14日	サイトオリエンテーション 分科会 OB/OGと分科会
8月15日	日米中3カ国協議 開会式、東京フィールドトリップ
8月16日	日米中3カ国協議 パネルディスカッション、グループ討論
8月17日	日米中3カ国協議 プレゼンテーション、閉会式
8月18日	分科会 外務省講演会 外務省主催レセプション
8月19日	分科会 フォーラム発表準備

8月20日	フォーラム フォーラムレセプション
8月21日	第58回日米学生会議実行委員選挙 自由時間
8月22日	閉会式
8月23日	アメリカ側参加者帰国 日本側参加者解散

(実行委員サイトコーディネーター：福田愛奈)

## 東京サイト活動記録

※参加者の活動記録を基にして作成している。

### 8月14日

オリエンテーションでは、日米中3カ国学生協議とフォーラムを成功させる決意をかためた。その後には2つ分科会討論が行われた。今まで経験して学んできたものを巧みにプレゼンテーションすべく要約することがいかに難しい過程なのかを実感した。夜、会議OB/OGを招いてのラウンドテーブルではアカデミックな議論から日米学生会議に参加しての思いまで語り合った。わたしたち参加者が3週間にわたって与え合った多彩な経験は、言語、国境、そして世代まで越えた人たちと共有できるものだった。



### 8月15日

3日間の日米中3カ国学生会議 (Japan-America-China Trilateral Student Conference) が幕を開けた。中国から招聘した学生を交えての会議は日米学生会議が始まって以来、初めての試みであり、わたしたちはこの日を心待ちにしていた。お昼頃、北京大学から来日した学生9人が到着し、開会式が始まった。自己紹介やアイスブレイキングのゲームをして、その後は5つのグループに分かれてフィールドトリップに出かけた。



### 8月16日

午前中は日中間の政熱経冷、靖国参拝、反日デモ等に関するパネルディスカッションを聞いた後に、少人数の班に分かれてディスカッションをした。午後からはグローバル企業のYKK猿丸様からレクチャーをしていただき、学生からは次々と質問が飛び出した。レクチャーの後は午前中と同様に少人数に分かれ、社員の方々を交えながら「グローバル企業に必要な要素は何か」という議題などで議論を行い、その後に各班による発表が行なわれ、最後に講評を頂いた。



### 8月17日

10:30 から各グループによる3日間の成果に関するプレゼンテーションが行われた。現在の日中関係の改善に

ついてもまた議論が交わされた。昼には飾り付けられた会場で和やかな雰囲気の中、閉会式が開催された。3日間という限られた時間ではあるものの、ともに話し合い、意見を交換した日本・アメリカ・中国の学生たちが別れのときを惜しみ、出発までのつかの間の時間を楽しくすごした。

### 8月18日

いよいよ会議も大詰めになり、午前中からフォーラムの準備にとりかかった。午後には沖縄と東京サイトのリフレクションが行われた。ここでは以前のように不満を漏らすものがないどころか、互いに励まし感謝し合う光景が見られた。夕方からは外務省にて文明の衝突とカテゴリー化の危険性についての講義を受けた。会場を移動し、豪華なレセプションを開催して頂いた。



### 8月19日

日米学生会議も大詰めの時期を迎えようとしていた。気がつけばフォーラムが明日に迫っていた。前日ということもあり、全員が準備に追われていた。分科会ごとや各々が担当する発表の単位ごとに集まり、1日中念入りの打ち合わせや資料作成を行った。それは深夜にまで及んだ。この1ヶ月間で学んだものは数え切れない。数々の事実。十人十色の思想。それを対外的に発信できる場なのである。この1ヶ月で経験してきたものが有意義なものであったと、それを明日示したい。



### 8月20日

第57回日米学生会議の集大成であるフォーラムが、東京アメリカンセンターで開催された。最後の大会に運営側である実行委員、参加者ともに入念な準備を重ねて挑んだ。わたしたちは、本会議における分科会、企画の様子や成果を発表した。非常に大勢の会議OB/OG、賛助企業や財団等の関係者、また一般の方々にお集まりいただいた。会場は溢れかえり、席数が足りないほどだった。大盛況の中、発表を終え、フォーラムの後には、夕焼けと東京タワーが見える会場でJASC Japanとの共催で交流会が行われた。



### 8月21日

いよいよ日米学生会議も残り2日。午前中、実行委員立候補者の「演説」が行われ、それに対する質疑応答があった。立候補者の熱い思いと他の参加者からの鋭い質問が飛び交った。その後、参加者全員による投票が行われ、午後には来年の第58回日米学生会議実行委員16名が決定した。午後からは、新実行委員を除いては自由時間となり、各自めいめいの時間を過ごした。



**8月22日**

午前中は自由時間だったので各自思い思いに過ごした。午後から学生のみでの閉会式が行われ、歓談を楽しんだり、写真を撮ったり、更にはスクリーンに参加者1人1人の写真が映し出され思い出に浸った。第58回日米学生会議の概要の簡単なプレゼンテーションも行われ、来年の日米学生会議の始まりを祝福した。最後のリフレクションタイムへと移り、多くのメンバーが1ヶ月を終えての感想、仲間への感謝の気持ちを語った。最後の夜、眠ることなく解散の朝を迎える人も多かったようだ。

**8月23日**

第57回日米学生会議の最終日。1ヶ月間、一緒に過ごしてきた仲間との別れの日。この日の朝は少しだけ悲しげな空気が漂っていた。皆で一ヶ月間を走り抜けた満足感もさることながら、第57回日米学生会議が終わりを迎えようとしている寂しさも合間って、さまざまな感情が全体を包みこんでいた。アメリカ側参加者がバスで空港へ向かって出発してしまうと、日本人参加者は可能な限りバスの後を追いかけて、手を振り続けた。バスから聞こえる「ってきます！」の言葉に、夏の会議が終わっても、これから続いてゆく友情を確信した。

**参加者ノート（中国企画）****中国企画 各論****1、東京散策**

大都市(新宿・池袋組)、若者の街(渋谷・原宿組)、歴史と伝統(浅草・上野組)、現代文化(秋葉原組)、日本の開国(横浜・みなとみらい組)という5テーマ・5グループに分かれフィールドトリップを行った。プレゼンテーションでは、それぞれの日常生活や衣料品の価格、初任給について語り合い、互いの文化がどのように浸透しているかなどを知ったことなどを発表し合った。参加者の会話は、中国で日本のアニメが熱狂的な人気を得ていることから、日本と中国における民主主義と資本主義の違いにまで及び、その多様さは興味深かった。

**2、スモールディスカッション****①民主化**

中国の民主化の実現は背後に様々な問題を抱えており、あと数十年はかかるだろうと予想される。そもそも中国人は民主化を望んでいるのか聞いてみると、冗談で民主化の話にはなるものの実際に望んでいるものはほとんどいないらしい。その理由は現在の経済成長に伴う社会の安定に起因するという。これを裏返せば、これから先民主化の動きが大きくなるともいえる。中国の内陸部と海岸側の経済格差は目覚しく、その不満によるデモは年に20000件発生しているからだ。日本に対するデモも民主化という枠内で考えるべき問題なのである。

政府が経済特区を内陸部に置き、経済格差を少しでも和らげようと努力していること、国民の不満が政府に向けられないよう反日デモを制御しつつ認めていることは、国民の不満が爆発し第三の天安門が起こらないようにしていることの現れと見ることができるだろう。

### 『ソフトランディング』

革命が起こることなく、ゆっくりとした経済成長を遂げながらも、徐々に民主化を達成することが中国に課せられた課題、キーワードである。この言葉は国分先生がおっしゃっていた言葉である。

#### ②教科書問題とメディア

歴史教科書をめぐっては相互無認識が明らかとなった。日本は8つの種類の教科書から各市町村が独自の教科書を選ぶ選定制度である。一方中国は国定制度である。しかし一種類の教科書しかないわけではなく、地域ごとに教科書が決められているようだ。お互いの制度の違いについて日中両国ともに理解不足が浮き彫りとなった。中でも中国人は誰も、日本の教科書の制度を知らないことには驚いた。この主原因はメディアにある。中国では国営のテレビ局しか存在しないし、ネットへのアクセスも限定されている。政府にとって不利な情報は国民には行き届かないしくみになっていることがこの問題の解決を難しくしている大きな要因である。また、メディアに関する法律がない点も問題だ。憲法と政策によってのみ規定されているため、政府が恣意的にコントロールできるのだ。

メディアに対して批判的になり、自ら調べることの重要性、またこのように直接それぞれの国の人が出会い、話すことの重要性を強く感じた。

#### ③靖国

一般的に靖国問題は日中間の問題とされている。確かに現状だけを見ればそうであろう。しかしこの問題の根本にある問題のひとつは東京裁判であり、米国も大きく関わっていたということをどれほどの人が知っていたらだろうか。

靖国問題の議論に当たっては「中国は日本がどこまで謝れば十分なのか」というアメリカからの鋭い質問にチャイナデリが答えられない場面があったり、「日本は口で謝っても行動が伴っていないからいけない」というチャイナデリからの指摘があったりとやや緊迫した、しかし白熱した議論が展開された。はっきりした結論が出なかったものの、三カ国とも東京裁判を認め、未来を見てこれから良好な関係を気づいていこうという思いは共通して持っていることを確認できた。

#### ④安全保障、台湾問題

米国が中国の経済成長を脅威と捉える中で、中国が軍備を増強している。台湾との統一のためなら武力行使も厭わないとする中国と米国の対立は深まり、台湾海峡周辺の軍事的緊張は高まりを見せている。皆が現状維持を望むこの危機に際し、日米安保がある以上、日本の行動は中国にとって米国の戦略と一枚岩であると考えられてしまう。このことが、尖閣諸島や資源問題の背景にあることを忘れてはならない。

#### ⑤経済

目覚ましい発展をとげる中国経済にも、問題がないわけではない。最も大きな問題は、沿岸部と内陸部の経済格差である。沿岸部に外国企業が押し寄せ富が集積される一方で、発展から取り残された内陸部との格差は広がるばかりである。内陸部の資源を利用した新たな産業の育成や、観光産業の発展が切望されている。日米の企業にとっても、中国内陸部は無限のビジネスチャンスが埋まっている場所だといえるかもしれない。

### 3、グローバルビジネスケーススタディ（YKK株式会社）

YKK株式会社のグローバル戦略について”From International to Global and Beyond”というテーマのプレゼンテーションを受け、スモールグループに分かれディスカッションを行った。テーマは”How do you define Globalization and what are the essential strength needed for Global Company?”である。まずはグローバル化の功罪についてブレインストーミングを行い、定義付けを試みた。

地球規模での経済・市場の拡大と統一化、アクターが国家から NGO などの非国家主体や地方コミュニティ・あるいは個人へ細分化していること、アメリカニズムや植民地主義との共通・相違点

は何か、富や情報・教育など様々な面で格差の拡大を招くこと、環境破壊を加速させることなどについて議論し、インフラ整備から教育・技術支援など政府・ODAの役割はどうあるべきかにまで発展した。

グローバル企業に求められる能力については、世界市場で通用する魅力的、かつ独自性のある技術や商品を製造することだけでなく、各地方における風土や慣習に柔軟に対応し変化できるシステムが必要であることなどが挙げられた。つまり、グローバルな視点で戦略を構築するとともに、多種多様であるローカルな状況に対応することが不可欠であるということだ。

(井上裕太)

## 中国企画 総論

今年初めて、日米中三カ国学生協議が幕を開けた。なぜ日米学生会議であるにも関わらず中国人学生を招いて会議を行う必要があるのか？

現在中国の経済成長は目覚ましい。日本の最大の貿易相手国が中国であること、元切り上げをめぐって米中関係が揺れていることからこの日米関係、日米両国にとって中国が重要な存在となることは明らかである。日米間の役割と可能性を探求する上で、中国人学生が日本や米国をどう見ているのか知ることが非常に重要であろう。

二つ目の理由は最近の日中関係の悪化である。反日デモや小泉首相の靖国神社参拝をめぐる中国の反発はその例である。政府レベルで硬直化しているこれらの問題に対し、メディアやネットの枠を越えて学生同士が直に自由に議論をぶつけ合うことは、学生だからこそできる事であり、米国という客観的な視点からこれらの問題を捉えなおすことも日中関係修復に大きく貢献すると考えられる。これからの未来をつくるのは我々学生なのだから。

こうして、文化的、政治的、経済的視点から、現在・未来の三カ国の関係を探求すべく会議はスタートした。一日目は5グループ（新宿・池袋組、渋谷・原宿組、浅草・上野組、秋葉原組、横浜・みなとみらい組）に分かれ東京散策を行った。二日目の午前中は三人の講師の方をお呼びしてパネルディスカッションを行った後スモールディスカッションを行った。慶應義塾大学法学部教授、同大学東アジア研究所所長の国分良成氏、アメリカ人ジャーナリストの長老といわれている Sam Jameson 氏、原田武夫国際戦略情報研究所代表、原田武夫氏をお呼びして「From Bilateral Tensions to Multilateral Cooperation」というテーマで講演をいただいた。スモールディスカッションでは各国の視点から現状分析を行いその打開策を議論しあった。午後は YKK 株式会社様にきていただき、「From International to Global and Beyond」というテーマで貴会社のグローバルなビジネス戦略の紹介をいただいた。その後グループに分かれて与えられた課題に対する解決策を話し合い、発表を行いそれに対し高い評価をいただいた。企業という実践的な問題について三カ国の視点から解決策を見出したことがよい評価につながったのだろう。この会議の意義、重要性を強く感じる事ができた。

東京散策を通じて、相手の国を実際に訪問することの重要性を実感し、様々な政治問題を話し合うことで中国との間にいかに相互無理解、無認識、不信頼が大きいかを突きつけられた。しかし同時に文化面での交流関係の深さも実感した。日本ではあまり知られていない女性ファッション雑誌が中国で人気という事実や、中国人の多くが日本のアニメ、漫画を知っているという話には驚いた。経済の結びつきが強いことも将来良好な関係を築いていく上で鍵となるだろう。

現在の中国の状況、そして日中関係は「政冷経熱」という言葉で言い表すことができる。中国は、その驚異的な経済成長の一方で、様々な政治問題を抱えている。経済の自由化と政治的抑圧の葛藤が近代の中国史を形作ってきたことを物語るように、中国の人びとは何より日常生活の安定とこの葛藤のソフトランディングを望んでいる。

反日デモなどの政治問題を越え、新たな時代を気づいていく我々にとって、多国間の草の根交

流・協力は不可欠である。文化レベル、草の根レベルの交流が将来の関係に大きな役割を果たすと実感した今回の三カ国協議は、日米中のみならずアジアや世界の未来を考える上で非常に有意義であった。

(前田 薫)

## 参加者ノート（東京サイト）

8月13日、沖縄を離れいよいよ最後のサイトである東京へと到着。14日のオリエンテーションでは、その日の夜に行われるOB・OGを交えてのディスカッションについて、このサイトで行われる三つのビックイベントである中国企画、フォーラム、そして外務省訪問について報告があった。ここでは中国企画を除く他のイベントについて見ていきたい。

まず、14日夜に行われた7名のOB・OGを交えてのディスカッションだが、各分科会ごとに分かれ議題を絞り訪問に臨んだ。さまざまなバックグラウンドや経験をもつOB・OGの方々のお話により、議論もより深まったものとなった。

16日、3人の講師の方を外部からお招きして、日本の外交や歴史問題について中国人参加者を含め全員でお話を伺った。今回、中国人参加者も講演会に参加するという事で、ゲストの方にも日中関係に詳しい専門家をお呼びし、現在の経済面での結びつきが強くなる一方、政治面でのあり方が問われている日中関係についてや、日中外交のひとつの大きな障害となっている歴史問題についてお話していただいた。全体での質疑応答の後、少人数グループに分かれ講演について議論を深めたり、各グループを交代で回って下さる講師の方に直接質問させていただいたりした。靖国問題や歴史教科書についてなど非常にセンシティブな問題に対しても率直な議論が交わされ、大変有意義な時間を持つことができた。午後からYKK株式会社の方から基調講演をいただき、その後もまた少人数グループに分かれ企業と雇用のあり方やグローバル化について議論が行われた。多国籍企業のあり方や国内雇用問題、人権など幅広い分野において議論が交わされた。

17日、前日話し合った内容をもとに各グループが発表を行った。同じ分野のトピックに関してもまったく違った意見が出るなど、各グループ個性的な発表がされた。

18日、外務省で行われるパネルディスカッションに参加した。大使である近藤誠一氏から日本の外交や安全保障問題などについてお話を伺った。全体での質疑応答の後、外務省主催のレセプションがホテルへと場所を移して行われた。そこでは外務省の方々をはじめ、OB・OGの諸先輩方、ほか日米学生会議にご協力いただいているたくさんの方々にお会いすることができた。レセプションは終始和やかな雰囲気のもと、これまでの学生会議の様子や共同生活についてなど身近な話題から将来の話までさまざま方とお話しすることができる貴重な出会いの場となった。

19日には次の日のフォーラムに備え分科会毎に準備を行った。そもそもフォーラムを行うことの意味は、今までの議論をまとめ第57回会議の集大成としてその成果を広く社会に発信することを目指すことにある。そのため、出会ってからこれまで毎日のように議論を重ね、さまざまな問題について話し合ってきたぶん20分という限られた短い時間に話を集約することの方が難しかった。準備は時間との戦いだった。少しでも多く今まで行ってきた議論の内容を盛り込みたいと思う反面、より簡潔に、受け手に伝わりやすいものしなければならない。そのため分科会ごとにパワーポイントを作成することにした。各班思い思い写真や映像、音楽を取り入れるなどの工夫を凝らしたりする姿も見受けられた。各自英語のスピーチ原稿を用意し、時間を計りながら読みあわせを行い次の日のフォーラムに備えた。

8月20日、フォーラム開催当日。朝9時30分にはオリンピックセンターを後にし、アメリカ大使館東京アメリカンセンターへと向かった。そして、リハーサルを行ったあと、1時からフォーラムは開催された。集大成ということもあり、協賛いただいているたくさんの方々の企業や法人、過去の参加者など多くの関係者の方々が参加して下さった。全体の流れとして、現在も活躍されている過去の参加者の方による基調講演が行われた後、各分科会の発表、本会議中の各企画についての発表、そして日米両参加者のスピーチ等が行われた。基調講演は、グレン・フクシマ氏をお招きして行われ、その後各分科会の発表が行われた。それぞれに用意してきたパワーポイントを説明しながら、

皆 20 分の発表に一所懸命であった。次に本会議中行われた各企画、滋賀で行われた環境プロジェクト、広島で行われた CRANE プロジェクト、東京で行われた中国プロジェクトについての報告会が行われた。そして、戦後 60 年を今日振り返る、という題目のもと 4 名の学生会議参加者がそれぞれの思いを発表した。その後、Jasc Japan の方にコメントをいただいた。その後、第 57 回の思い出を写真や音楽、映像と共にパワーポイントで来場者の方々と共に発表。最後に第 57 回実行委員長である日本側代表者 杉田道子とアメリカ側代表者 Ashley Neeley がそれぞれに挨拶をし閉幕した。非常に充実したフォーラムとなった。フォーラム終了後、場所を移し来場者と会議参加学生の交流会も行われた。お茶やお菓子をいただきながら参加者 6 名の感想やスピーチに耳を傾けた。

(佐藤 愛)